部品加工から一気通貫 ニーズ応える自動化装置

星工業㈱ 代表取締役社長 **田中 裕二さん**

星工業（中央区田名塩田）は、オーダーメイドの産業用自動省力化装置を設計・製造しています。顧客は医薬、食品、自動車産業など100社を超え、容器に液体を注ぐ機械や樹脂テープを作る機械などが得意です。設計から部品加工、組み立てまで、ほとんどを自社でこなし、お客様のニーズに一気通貫で応えられるのが強みです。

■高い内製化率

同社の社名は、1948年に星が丘で創業したことが由来となっています。勤め人だった現会長が91年に創業者から事業を継承して経営規模を拡大、2018年に子息の田中裕二社長が40歳で3代目として就任しました。91年といえばバブル崩壊の年ですが、現会長は自動車部品の下請けから脱却し、樹脂の押出成形機など完成品の機械を開発・生産する仕事を広げ、次々と自動省力化装置を生み出してきました。

現在の社員数は27人。同社の強みは「設計部門」と「営業部門」が分かれていないことです。営業も技術も分かる営業技術部の4人が、お客様の相談を受けると、その場で機械の概要や価格の目安を提案します。工場の現場には10人を配置、外部の協力企業ともめっきや熱処理工程で密接に連携しますが、切削加工や板金加工はほとんど自社でこなしています。部品から自社で作り込むことで、工夫を凝らした優れた機械を提供できるのです。

■社内で「鑑賞会」

田中社長は最初は外の会社に勤め、20年前に家業に戻り技術職をしていました。経営を引き継ぐことになり、「相模原市青年工業経営研究会」に入って学びました。若い経営者同士が互いに厳しい指摘で学び合う研究会で、鍛えられたといいます。

そんな田中社長発案の「鑑賞会」は、新しい機械が完成すると、営業技術部だけでなく部品加工の担当者も集めて意見交換するものです。「あなたの部品はここに使われています」「この部品は素晴らしい」「ここはこうするともっと良かったのでは」といった会話が、技術力のアップと若い社員のモチベーション向上に役立っています。

技術力の強化にも余念がありません。今後のロボット時代への展開を見据えて「さがみはらロボットビジネス協議会」に加入し、本格的なソフトウエア技術の情報を収集しています。部品加工の若い担当者にCAD設計を勉強させたり、設計担当として入社した人に組み立て工程を体験させるなど、技術の守備範囲の広い人材を育てる工夫を凝らしています。

■オリジナル製品も

営業活動は、既存のお客様が製品を評価して次の新たな発注につながるケースが多いです。新規顧客を開拓するため展示会にも出展しますが、悩みはお客様との守秘義務契約が多く公表できる製品が少ないこと。このため、自社オリジナルの機械を開発する取り組みを始めました。さまざまな業界のさまざまな企業で使える、汎用の液体充填機を作るべく、社長も参加するプロジェクトチームで議論を始めています。

田中社長は5年前に、2030年を見据えた長期ビジョンを策定しました。社員数は40人体制に増やすことを計画し、即戦力の中途採用だけでなく新卒含めコンスタントに採用を進めています。本社の社屋と工場も手狭になっており、第2工場のビジョンも立案しています。田中社長は「我が社のものづくりは、こんなことやってみたい、というアイデアがいろいろ出てきます。責任を持ってゼロから機械を作っていくところがおもしろいです」と話しています。